

現代日本語「つけ」の意味機能 ～「スルつけ」と「シタつけ」～

高橋美保（韓国外語大学）

1. はじめに

現代日本語の「つけ」（以下「ケ」と表記する）は、文末に使用されて話し手の記憶情報を根拠に判断したできごとであることを表わす。動詞述語の場合は過去形「シタつけ」、名詞述語は「ダつけ」の形で使用され、話し手の疑問や詠嘆を表わす(例1)。

しかし、最近の話し言葉では「スルつけ」という形も見られる。先行研究では次の例2のような「スルつけ」は非文もしくは不自然、または若者が使用するものだと指摘している。本稿ではまずケの意味機能とケが接続する述語の形を考察する。そして、これまで不自然であると言われてきた「スルつけ」について述べる。

(1) 麻子の知っている顔だった。石川…なんといったつけ。石川…そう、淳史だ。略。
去年の秋、会社の寮祭に行ったときも、充と同じ模擬店を担当していて、エプロン姿で焼きそばを焼いていたつけ。(地下街27)

(2) #澆油だ#澆油なんて給食に出るつけ#田舎だ#あ#(日常会話コーパス)

2. 先行研究と本稿の立場

中島(2011)は、ケを終助詞とし、①回想内容を詠嘆的に述べる場合と②聞き手への質問を表わす場合の二つの用法に分類している。上接する語については助動詞「タ／ダ」の二つに限定されていると述べている（どこに置いたつけ／どこまで行くんだつけ）。また、関西の若い人や子どものくだけた談話の中で「明日、試験あるつけ？」「今日、日曜やつけ？」などを耳にするが、こうした形は規範から外れており、発話者はくだけた場面で気の置けない相手に向かって、多少ふざけた態度で発話していると言っている。このような使用は拡大用法であるが、既にケが終止形承接の終助詞として扱われていることの左証かと思われるとも述べている。

次に、吉田(2019)は文末形式ケの《想起》という機能をモダリティと関連づけながら認識面と伝達面を対応させながら論じている。またケを平叙文と疑問文を共に表現できる形式として位置づけている。そして、ケで表わされる事態はテンス的に見れば発話時以前に既に生起した過去の事態が基本となるためにケが表わす事態はシタ形が多いが、未来の予定などではノダ形やスル形の使用もあると言う。スル形が使用される例としては時間的限定性が少ない名詞文や形容詞文などの静的な事態を述べる場合を挙げ、例として「あれ、ちがうつけ？」などを挙げている。

先行研究ではケの意味機能を中心に考察が行なわれており、「スルつけ」に関しては言及されているものの、詳しい考察はされていない。本稿では、ケ文の意味的特徴とケに前接する述語のテンス形式を中心に考察を行なう。そして、先行研究では不自然な表現として扱われてきた「スルつけ」について、日本語母語話者への調査と会話コーパスの実例をもとに考察する。今回収集及び使用した用例は、現代日本語小説の約200例と『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版』の用例である。また、話し言葉で使用される「スルつけ」は書き言葉には現われないため、話し言葉コーパスを使用した。

3. 意味的特徴

3.1 ケの基本的意味

『日本国語大辞典』によると、ケは「回想の助動詞ケリの変化したものと言われ、主として関東地方に分布するだけとも言われる」とある。そして、「過去の事柄を詠嘆的に回想する話しことば」としている。つまり、＜詠嘆的回想＞が元々の意味機能のようである。話し手の＜詠嘆的回想＞を表わすケ文は平叙文であるが、「何でしたっけね」「幾つだっけな」のように疑問詞を伴ったケ文もあり、話し手の不確かさを表わす疑問文としても用いられたようである。

- (3) 「コレおとみさん、やげんぼりからことづけがあったっけ」 / 「アノ何でしたっけね」
/ 「こっちのおとつつあ、幾つだっけな、少(ち)っと白く成ったなあ」 /
「おつう、そこらに砂糖はなかったっけえ」

3.2 現代語ケの意味機能

ここでは、ケ文に描かれたできごと(文の対象的内容)とコンテキスト(文脈)を分析し、現代日本語のケの意味機能を確認する。まず、話し手が直接体験した過去のアクチュアルなできごとを回想して述べる場合である。例4は上で述べた詠嘆的回想のケであるが、現代ではこのようなく詠嘆のケはさほど多くなく、例5のように忘れていたことを発話時に回想するだけ場合が多く、「そうだ/そういえば」などが共起しやすい。この場合は詠嘆の意味は少ないため＜回想＞とし、現在のできごとを思い出す場合もある。＜詠嘆＞と＜回想＞は、終助詞「ね(え)」や「な(あ)」を伴うこともあり、平叙文である。

- (4) 「学校の工作の時間に、何でマンガのもんなんか作るんだって、カンカンだったよ。そんなもん捨てちまえて怒鳴りつけたっけね」(楽園)
(5) (そう言えば、前に会ったときは、なぜかいきなり睨みつけられたんだっけ…) (永遠に見る夢)
(6) 「やっぱり、君は若いんだよ。ぼくなんぞは景色の方を覚えたいね」「あ、そうだ」吉村は箸を止めて言った。「今西さんは、確か俳句を作るんでしたっけ。それで景色に特別に注意が向くんですね。略」(砂の器)

次は、思い出そうとしたできごとや記憶情報に曖昧さがあり、話し手の＜疑問(疑い)¹＞を表わす場合である。話し手自身の過去の行動に関する記憶情報や、第三者に関する記憶情報が曖昧なため聞き手に質問しており、疑問詞と共起することもある。ケ文は疑問文として機能し、ケは疑問の終助詞「か」に近づいている。「っけか」という形もある。

- (7) 「って、死んだ親父さんが、いってたんですよね」「…あれ、この話、したっけか」「ええ、何度も」(月光86)
(8) 「あいつ、確か大病院の跡取り息子だったよな。小児科だっけ」(空中ブランコ)
(9) 「(略)。あんたは…ねえ、あんた、名前なんだっけ」「希和子」(八日目の蝉)

このようなく疑問(疑い)＞を表わすケの機能は、コンテキストによっては話し手の＜驚き＞＜怒り＞＜感嘆＞＜皮肉(あきれ)＞などのプログラマティックな意味を表わすことにつながる。次の例では、話し手の記憶情報と発話現場の現実情報にギャップがあることに気づき、話し手が自分の記憶情報が正しいかどうか、ギャップを埋めるためにも聞き手に確認するのである。これらのケ文は、疑問文として機能しているものの、単なる質問にとど

¹ ＜疑問＞は話し手が不明な点を聞き手に質問をする場合、＜疑い＞は不明な点があることを表明するにとどまる場合である。前者は対話文で使用され問いかけ性のある疑問文、後者は地の文や独り言で使用される問いかけ性のない平叙文である。しかし両者の区別が難しいこともあり、その場合は＜疑問(疑い)＞と記す。

まらず、次の例では<驚き><怒り>などの話し手の様々な気持を表わしている。

(10) 教頭は休憩室で新聞を読みながら煙草を吸っていた。「教頭先生、煙草吸いましたっけ」「もう関係ねえと思ってな、もともと吸っていたんだ。」(高校教師α)

(11) 「それはわかっている。だからこそ、正直に話してもらえんと思っっているんだけどね」
「何か西脇さんに嘘を言いましたっけ」「香里ちゃんのことだよ。略」(片想い)

4. 文法的特徴

4.1 名詞+っけ：「ダっけ」「ダッタっけ」

非過去形「ダっけ」は、人の名前や出身、年齢などの現在にも成り立つできごとを表わす名詞文につく。否定形は過去形「ジャナカッタっけ」が使用される。例14, 15は過去形「ダッタっけ」を使用しているが、「ダっけ」に言い換えられる。過去形のムード用法(想起)である。しかし、最後の例の「一緒だった」は過去テンスを表わしているため、非過去形「ダっけ」に言い換えにくい。このように「ダっけ」の名詞文は現在のできごとが多く、過去のできごととは少ない。

(12) 「鮎村さん…だっけ、どうしてテレビなんかに出る気になったのかな」(さまよう刃)

(13) でも、ここ、カラス通りなんて名前だったっけ。(話のびっくり箱3年)

(14) 「難解だな。あの店ってこんなに複雑なところだったっけ？」(蹴りたい背中)

(15) そうだった、あの夏祭りの夜、自分はアキラ君と一緒にだったっけ。(人生のもう一つの扉)

4.2 動詞+っけ：「シタっけ」「シタんだっけ/スルんだっけ」

4.2.1 シタっけ

「シタっけ」には過去のアクチュアルなできごとをあらわす場合(例16~17)と、人や動物の特性といったポテンシャルな現在のできごとを表わす場合(例18~19)がある。後の2例では現在のできごとに過去形「シタっけ」が使用されている。

(16) 「学校の工作の時間に、何でマンガのもんなんか作るんだって、カンカンだったよ。そんなもん捨てちまえて怒鳴りつけたっけね」(楽上99)

(17) 「会ったのは奥さんだけです。いいましたっけ、若くて綺麗な人でした」(魔女70)

(18) 「けど…うちで作ってるのって、野菜だけだぜ。蛇って野菜喰ったっけ？」(もともちゃんの夢日記)

(19) 「教頭先生、煙草吸いましたっけ」「もう関係ねえと思ってな、もともと吸っていたんだ。(略)」(高校教師α)

4.2.2 シタんだっけ

<詠嘆>の場合、基本的には「シタっけ」という形で表わされるが、発話現場で何かのきっかけに突如思い出した<回想>の場合にはノダを介した「シタんだっけ」が使用される傾向がある。「シタんだっけ」は心内発話や独り言で使用されやすい。

(20) この胸ポケット、ママが縫ってくれたんだっけ…。(転)

(21) 「去年の正月、俺はどうしたんだっけな」剣次郎は声に出して自分にそう問いかけながら階段をおりて行った。(鈴河岸物語)

(22) 「そうだ。私帰ろうとしてたんだっけ。こんな夕方まで体操服着て、何やってんだろ。そんじゃ。」(蹴りたい背中)

また、「シタっけ」が直接体験により得た記憶情報であるのに対し、「シタんだっけ」は間接的に得た記憶情報、例えば伝聞による記憶情報を表わしやすい。

(23)「辛抱が足りないねえ、若いもんは。そういえば小柳ルミ子はもう離婚したんだっけ?」「どうだっけ」(プラナリア)

4.2.3 スルんだっけ

発話時現在に進行中のアクチュアルなできごとや、人の趣味や習慣などの恒常的特徴や、時間軸に位置付けられない脱時間表現などのポテンシャルなできごとに「っけ」が後接している。最後の例27は、未来の予定をスル形で表したものである。「スル(シテイル)っけ」という形はないため、ノダを介して「スル(シテイル)んだっけ」となる。

(24)「ねえねえ、お父さん、いくつ釣ってるんだっけ?」(熱球)

(25)「徳さん、ボートはやらないんだっけ?」(せんえつですが…。)

(26)「南風って、英語で何て言うんだっけ」「サウス・ウインドです」(13階段)

(27)「…巽さんは、今日も新潟にいくんだっけ」「ああ。今回はちょっと日帰りは無理だなーなんだ、寂しいのか」巽が目を細める。(ハッピーハーレム)

5. スルっけ

現代日本語小説や現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の「書籍」では「スルっけ」を使用した文は見られない。しかし、先行研究でも指摘されているように、話し言葉では「スルっけ」という形を耳にすることも珍しくない。ここでは、どのような条件下で「スルっけ」という形が可能になるのかを考察する。

まず、＜詠嘆＞を基本的な意味機能とするケは、文の対象的内容には話し手が直接体験した過去のできごとが記憶情報となる。その場合「シタっけ」が過去テンスを表わしているため、非過去形「スルっけ」に置き換えることはできない。しかし、現在も成り立つできごとを表わす「シタ(シテイタ)っけ」や「スル(シテイル)んだっけ」、未来の予定を表わす「スルんだっけ」では、「スルっけ」形式への置換えに揺れが見られる。次の＜表1＞を見られたい。①のできごと時が過去の場合は「スルっけ」に置き換えると非文になる。しかし、②③現在のできごとの場合は、「スルっけ」に置き換えられる(非文ではない)という日本語母語話者も多かった。例えば、「蛇って野菜喰ったっけ」は「喰うっけ」に、「ボートやらないんだっけ」を「やらないっけ」に言い換えても非文ではないということである。もちろん回答者の中には「多少ニュアンスの違いがある」「文脈によって使い分けることもある」という意見もあった。これに対し、④未来のできごとの場合は「スルっけ」の許容度が下がる。「今日も新潟に行くっけ」を非文とする傾向が高いものの、非文ではないという答えた人もわずかではあるがいた。しかし、同じ未来のできごとでも「明日試験あるっけ」のように存在動詞を用いた場合には、「あるっけ/あったっけ」どちらも可能である。また、②現在のできごとの「シタっけ」は「スルっけ」だけでなく「スルんだっけ」にも置き換えられるという意見も多く、「蛇って野菜{喰った/喰う/喰うんだ}っけ」の3つの形のニュアンスの違いなども興味深いが、これは今後の課題にしたい。

＜表1＞「スルっけ」形式との置き換え

	できごと	形式	用例	スルっけ
①	過去	シタっけ	怒鳴りつけたっけね。/この話、したっけー	×
②	現在	シタっけ	蛇って野菜喰ったっけ/鞆にナンバー入ってたっけ	○
③	現在	スルんだっけ	ボートやらないんだっけ/英語で何て言うんだっけ	○
④	未来	スルんだっけ	今日も新潟に行くんだっけ	△

しかし、現在に成り立つできごとであっても、次の例のように＜回想＞の意味機能を持

つ平叙文は「スルっけ」との置き換えがしにくい。つまり「スルっけ」という形が使用できるのは、対象的内容が現在も成り立つできごとで、話し手が聞き手に質問する疑問文として機能する場合に「スルっけ？」との置き換えが可能になるようである。

(28) 営業部長は、「まじめ？ああ、そういえばいたっけね。なに、荒木ちゃん。引き取ってくれるの？」と、喜色を浮かべた。(舟を編む)

(29=6)「今西さんは、確か俳句を作るんでしたっけ。それで景色に特別に注意が向くんですね。(略)」(砂の器)

最後に、会話コーパスや、一部の書き言葉コーパス(知恵袋やブログ)で実際に使用されている「スルっけ」の用例を確認してみたい。次の例30～31では、最近の給食の献立、生協のポイントカードの更新システムという現在のできごと、運動動詞「出る/来る」のスル形に直接ケが後接している。特に例32～34のように状態性の動詞のスル(シテイル)形の例が多く見られた。最後の例35は、否定形ではあるが未来のできごとである。

(30) #澆油だ#澆油なんて給食に出るっけ#田舎だ#あ#(日常会話コーパス)

(31) #でも、生協のあのカードは大丈夫なんだ。#うん#やめないかぎりいけるんじゃない？#略#あ、なんかでも継続しますかみたいなのが来るっけか。(名大コーパス)

(32) 学校はそんなに遠くないけど#Aってどこにあるっけ？#Aね、市ヶ谷なんだよね。(名大コーパス)

(33) 昔はなんかこう、あの人って英語できるよね。#うん#あ、そうなの？#たしか。#できないっけ。#なんか、モデルだよね、元。#えーそうなの？#(名大コーパス)

(34) #生春巻きなんて作るんだ、すごいね。#でも、まだ作ってないんだ。#えっ、でも作り方わかるんでしょう。#知らん#何が入ってるっけ。#何だっけ。(名大コーパス)

(35) #紅白、なんか今年かなりしけてる気がする。#あれ、SMAP出ないしさー、あと、GLAYも出ないっけ。#そう#あゆは出るんだ。(名大コーパス)

6. おわりに

現代日本語の「っけ」は、話し手が記憶情報をもとに判断したできごとを文の対象的内容にもち、従来の意味機能である<詠嘆>に加えて、<回想>や<疑問(疑い)>の意味機能をもつ。ケは動詞述語では「シタ(んだ)っけ」や「スル(んだ)っけ」、名詞述語では「ダっけ」の形で使用される。先行研究では現在のできごとの場合にも「シタっけ」が使用されるとあるが、最近の若者の会話を中心に「スルっけ」の使用も見られる。本稿では紙幅の関係上述べられなかったが、名詞文の丁寧体は「デシタっけ」であり「デスっけ」は非文とされてきたが、最近「デスっけ」の使用を耳にすることも少なくない。本稿は、先行研究では詳しく取り上げられてこなかった「スルっけ」について、どのような条件下で使われるのかを明らかにし、会話コーパスの用例で再確認をすることで、現代日本語の「っけ」の新しい一面を見つけることができたと思う。

【参考文献】

- 小坂光一(2004)「『ケ文』の意味構造」『ことばの科学』17, 名古屋大学, pp. 139-157
中島一裕(2011)「現代語『っけ』の意味機能」『帝塚山大学人文学部紀要』29, pp. 31-41
日本大辞典刊行会(編)(1974)『日本国語大辞典 第七巻』小学館
又平恵美子(1996)「終助詞の研究-『っけ』の機能-」『筑波日本語研究』創刊号, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室, pp. 21-33
吉田雅昭(2019)「文末形式『っけ(ケ)』の機能と用法-モダリティと文末詞(終助詞)との関わり-」『社会と人文』第16号, pp. 41-57